**世界の言語を発見しよう**

１．単元目標

㋐　クラスメートが知っていたり、話すことのできる言語を共有することによって、外国語は身近な存在であることに気付き、言語の多様性に慣れ親しむ。

㋑　「言語」とは何かについて考え、さまざまな外国語の資料（歌など）に触れながら、「言語」に対する理解を体験的に深め、特に音声面において日本語と外国語の共通点や違いに気付くとともに、外国語学習に必要な知識・スキルを育成しようとする。

㋒　いくつかの言語の共通点・相違点に対する理解を深めることにより、主体的に外国語を学ぼう・使おうとする態度を養う。

2．小単元名

①　世界の言語を発見しよう

②　世界の声　―いろんな場所の歌―

3．児童観

日本の児童は、学校で国語の時間に学んでいるのが「日本語」であること、また外国語の時間に学ぶことになるのが「英語」であることはおそらく聞いたことがありますが、日本語や英語のほかにも言語がたくさんあること、自分の知らない言語を話す人がたくさんいることは、体験的に知らない人がほとんどです。低学年では、「外国語」という意味で、「えいご」という言葉を使うこともあります。このように、児童にとっての言語には、「自分の話していることば」と「えいご」しかありません。

いっぽうで、低学年は特に言語の音声面への感受性が豊かで、聞きとれた音を再現することを楽しみます。

4．教材観

日本語（国語）や英語（外国語）をふくむ「言語」に多様性があることや、それらの言語の地位について気づかせるための教材です。特に音声面からアプローチをすることで、児童は学校で習う言語だけではなく、世界には多くの言語があることを知り、また、「〇〇語が話せるからえらい」といったステレオタイプを超えて、いろいろな言語話者の地位が平等であることを知ります。さらに、また他の児童が知っている言語があれば、それらを承認するようにします。

この教材は、「言語」とは何かの知識を提供するだけではなく、言語の働きを自ら発見する機会を与え、能動的学習を促します。さまざまな言語に触れることで、児童に言語の仕組みについて考えたり、母語と外国語の共通点と相違点に気付かせることを通して、今後特定の言語（英語）を学習する際に必要な能力を育成し、言語に対する知識の範型（スキーマ）を形成させます。

5．指導観（全体）

児童にとって知らない言語は、新しい興味の対象になることもあれば、「理解できないもの」として、不安の材料になることもあります。そこで教師の態度が重要になります。

教師やALTは、児童よりもたくさんの言葉を知っていたり、話したりしますが、だからといって、教材に出てくるすべての言語を完璧に知っていることはありえません。教師やALTは、「教材に出てくる言語を完璧に知っている人」という役割ではなく、「教材に出てくる言語を児童と一緒に観察し、発見する人」の役割を取ることで、児童が探究活動に入りやすいようにします。

**小単元①　世界の言語を発見しよう**

1.　小単元①の目標（評価規準）

言語と単語の違いを知る／言語が複数あり、多様であることを知る

①　（関心・意欲・態度）言語とは何か、知っている言語・話せる言語について考えようとする。

②　（思考・判断・表現）それぞれの言語は似ているか、違うかについて考えて話し合う。知っている言語に関して、自分の表現ができる。

③　（知識・理解）「言語」、「単語」とは何かを理解する。

2.　教材観

日本語（国語）や英語（外国語）をふくむ「言語」に多様性があることや、それらの言語の地位について気づかせるための教材です。

話せる「言語」は日本語だけであっても、「単語」のレベルであれば、さまざまな言語の言葉を既に知っていることに気づかせます。

自分が話したり、よく知っている言語には、愛着があること、だから他の言語を話したり、それらを知っている人は、その言語に愛着があることについて知ります。

２.　指導観

子どもたちがグループで話し合ったり、それをクラス全体で共有して話し合う形で進めます。配布資料の答えをもとに主に児童生徒たちの知識から授業を展開させていくことで、児童生徒の興味・関心を引き起こしながら授業を行います。本時の目当ては「げんごについて知ろう」ということで、正解・間違いがないことを明白にすることにより、児童生徒の積極的な参加を促します。

３.　 小単元①の展開

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 学習内容・学習活動  （時間配分） | 指導上の留意点 | 資料 |
| 1. あいさつ（10分）  教師が挨拶・事項紹介をする。 | ・ALT：出身国で話されている言語のこと：英語・その他の言語のあいさつをする\*1。  ・HRT：知っている外国語のあいさつをする。  ・教師の二人が日本語で簡単な事項紹介（なんと言ったか、何語だったか）をする。  ・本時の目当て、「言語について知ろう」を板書し、復唱させる。 |  |
| 2. 『せかいの「言語」』に書き込む（３０分） | ・T1：書き込みの進み具合を見ながら、児童生徒を指名し、口頭で確認する。  ・T2：口頭で確認しながら、児童生徒の答えを板書する。  留意点１：問すべてに回答することは必ずしも必要ではなく、ここでのポイントは言語の多様性や言語の地位、すべての言語話者の地位が平等であること、児童の知っている言語に焦点を当て、承認していくことにあります。  留意点２：T1+T2+児童生徒の対話形式で授業を進める意図で、発言数が片方に偏らないように注意する。 | 『せかいの「言語」』プリント（付録１を参照） |
| 3. 本時の振り返り（５分） | ・児童生徒に「ふりかえりシート」に記入させる。  ・口頭で感想を言ってもらう。  留意点：発言数の少ない児童生徒に積極的に感想を言ってもらうように注意する。 | ふりかえりシート（付録１を参照） |

**小単元②　世界の声　－いろんな場所の歌－**

1.　 小単元②の目標（評価規準）

言語音の多様性を発見し、受け入れる／よく知らない言語音を注意深く聞く

①　（関心・意欲・態度）知っている歌（特に動物が出てくる歌）について考えようとする。

②　（思考・判断・表現）歌を聴いて、どんな動物が出てきたかについて考えて話し合って、感想の表現ができる。外国語の歌がマネできる。

③　（知識・理解）言語の中身に違いがあっても、言語の使用に共通性があることを理解する。

２.　教材観

言語音の多様性を発見させる教材です。子ども向けの歌を通して、まずは、言語には様々な音があることに慣れます。そして、マネをしようとすることで、よく知らない言語音を注意深く聞く力を身につけます。A ram sam sam （モロッコ民謡：「馬に乗ってギャロップで行こう」という歌詞）では、歌とダンスを組み合わせて、みんなで行います。教材の目的は、他の言語の音声習得というよりも、違う言語に違う音が存在することに気付かせること、また、違う言語でも同じような歌があったりするなどの共通点があることを理解させることです。動物が出てくる子供向けの歌はさまざまな言語に存在するため、これを教材にします。

3.　指導観

・外国語に対する抵抗をさげる／共通点を自ら発見することにより、外国語をより身近なものにできる

4.　 小単元②の展開

|  |  |  |
| --- | --- | --- |
| 学習内容・学習活動  （時間配分） | 指導上の留意点 | 資料 |
| 1. あいさつをする。（５分） | 。 |  |
| 2. 前時の振り返りをする。本時の目当てを提示する。（５分）  ３．外国語の歌：ウォームアップ（10分） | ・T1/T2が対話的な形で前時の内容の振り返りをさせる。  ・本時の目当て、「いろんな言語の音を聞こう」を板書し、復唱させる。  ・モロッコ民謡「アラムサムサム」を少しずつ教えて、クラス全員で歌えるようになる。  ・小さい子どもの真似、お父さんの真似、お年寄りの真似をするなどして、歌う。 |  |
| ４. 新しい歌の意味を知ろう（2０分） | ・児童が知っている歌の名前を挙げてもらう（日本語でも、外国語でもよい）。  少しでも歌える子どもには、歌ってみてもらう。・質問する：「動物が出てくる歌を知っていますか」「今さっき挙げてもらった歌の中に、動物に関するものはありましたか」  ・外国の歌を聞かせて、その特徴について話し合いをさせる。  ・T1/T2が重要単語の意味をある程度説明し、歌の内容を理解させる＊２。  留意点： 人前で歌うことを恥ずかしがったり、知らない外国の歌をマネすることが不安な児童には、手拍子をしながら聞くだけでも参加できることを伝える。 | 歌の資料、中国語の歌のプリント（付録２を参照） |
| 4. 本時の振り返り（５分） | ・児童生徒に「ふりかえりシート」に記入させる。  ・口頭で感想を言ってもらう。  留意点：発言数の少ない児童生徒に積極的に感想を言ってもらうように注意する。 | ふりかえりシート（付録１を参照） |
| \*2　ここで児童が意味を取れるようにところどころ単語の意味を教えて、全体的な意味を取らせる。ただし、完全な逐語訳（すべての文字を日本語に対応させること）は避けるよう注意する。外国語の学習＝逐語訳というイメージがあるが、そのようなイメージの伝達はなるべく避ける。 | | |